

小田原地方史研究

32

『小田原地方史研究』第32号刊行にあたって (1)

【論文】

伊勢宗瑞花押の形態変化について 山口 博 (2)
小田原藩主稲葉正則の鷹コミュニケーション 下重 清 (20)
二宮尊徳と箱根の桜 坂井 飛鳥 (39)
「函嶺」から見た戦後の箱根療養所の傷痍軍人 井上 弘 (52)

【研究ノート】

「北条幻庵覚書」の成立年代と竊松院婚礼時期の考察 浅川 徹 (72)
二宮家の土地所持と売買・譲渡 松尾 公就 (79)

【資料紹介】

駒林川田家文書について 梯 弘人 (95)

【書評】

荒木仁朗『江戸の借金ー借りてから返すまでー』 加藤 弘之 (106)
松尾公就『報徳仕法の展開とネットワーク』 木龍 克己 (111)

バックナンバー通信販売のご案内 (116) 研究会活動報告 (116)
会員募集のお知らせ (117) 編集後記 (118)

2024年7月

小田原地方史研究会

編集後記

「失われた三〇年」(ロストジェネレーション)のしつぺ返しが政治の世界では吹き荒れている。景気を好くするという「神話」を掲げ、ゼロ金利を維持することで、バブル崩壊とともに本来潰れるはずだったゼロコンと銀行を助けてきた。その間、先進国では想定通りにインフレと少子化が進み、経済成長だけではない協調や社会持続を模索してきた。

我が国は低成長を言い訳に国債を増やし、将来の納税者たる子どもや働きたい女性たちに目を向けず、持続可能な社会への転換に心を割かずにやり過ごしてきた。それが三・一一での原発事故や能登地震での大火災を引き起こしたともいえる。一年以上前から予兆の地震がありながらなぜ石川県は古びた観測機器を使用し続け、またNHKアナウンサーは避難だけを絶叫し続けたのか。おかしいと感じた発言・提言を活かせず、漫然と放置してきたのか。少子化で就労人口が減少する中、消費やデジタルだけに依存しない暮らし方を模索することが、タワマンや自動運転電車・バスの無い地方での生活には大事なことのように思える。

長年地域資料を扱ってきて、この三〇年で危機意識はさらに募っている。公文書は三〇年過ぎれば廃棄できるのではなく、地域の歴史を物語る史料として永遠に受け継ぐ努力をしなければならない、経費をかけてもそうしなければならないはずである。地域の人びとや共同体・自治体、すでに無い企業・組合のアイデンティティーがアナログなまま、未来の住民・研究者に拾い上げてもらうのを待っているタイムカプセルなのだから。

令和に入り、自治体の指定文化財となつている個人所蔵の古文書類も、昭和・平成の当主が努力して保存してきたのに、災害に遭わずとも若い当主への代替わりに際して、その価値を理解できずに処分しかねないケースが多々見受けられる。村役人の子孫宅に残った古文書も公文書である。こうした個人所蔵の古文書も行政機関(公文書館、資料館、博物館、図書館)が積極的に手助けし、未来へ引き継ぐため引き取り保管すべき時期に差し掛かってきたといえる。勿論、保管場所と維持経費も必要だが、一番大事なことは史資料を整理・分析し、その価値を見い出せる学芸員・アーキビスト・専門研究員をも一緒に育てる必要があること。地域社会の歴史を受け継ぐとか、残すこととはそういうことではなからうか。(下重)

小田原地方史研究 第32号

二〇二四年七月二〇日発行 [税別頒価九五〇円]

編集人 下重 清

発行 小田原地方史研究会

代表 井上 弘

〒400-0001 小田原市中央町1-13-11

〒400-0001 小田原市中央町1-13-11

印刷・製本 オリジンピア印刷株式会社

〒550-0002 大阪市西区江戸堀2-1-13

☎06-6448-8508 (代表)